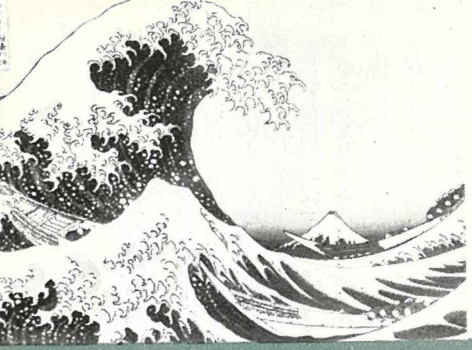

上映映画解説

1954, 11～1955, 1

國立近代美術館　フィルム・ライブラリー

No. 30

各国美術映画週間

各国美術映画週間について

フィルム・ライブラリーでは、内外古今の優秀映画の収集保存とその活用に努め、月・水曜日を除く毎日二時から月例映写会として各種の短篇映画を上映しております。今回は我が国ではじめての試みとして「各国美術映画週間」を開催し、各国の美術映画を一週間ずつ国別にとり上げて上映いたします。

各国美術映画週間日程表

第一週（11・16～21）日本（その一）
第二週（11・23～28）フランス
第三週（11・30～12・5）日本（その二）
第四週（12・7～12）ドイツ・イタリア
第五週（12・14～19）ソ連・パキスタン
第六週（12・21～28）イギリス・インド
第七週（30・1・4～12）アメリカ
第八週（1・13～24）メキシコ・ベルギー

（この日程は多少の変更があるかも知れません。又場合によっては、美術映画以外のものを上映することもありますから、予め御承知下さい）

美術映画は創造する

滝口修造

美術映画は戦後あざやかに浮びあがつてきた映画の新しい一分野だということができる。その種類や扱いかたもさまざまであるが、最近とくに注目されるのは、絵画を映画的な角度と技術で自由に再構成してゆく手法で、イタリアのL・エンメルなどはルネサンス時代の壁画から一つの感動的な物語をつくることに成功しているし、日本に紹介されたゴッホ映画なども、絵画を映画的にモンタージュしてゴッホの芸術的生涯を物語る新しい形式であつた。「ルノアルからピカソまで」にもかなり自由な映画的解釈が加えられている。こうして映画の感覚を通して美術作品を分析し、一つの映画的な創造にまでたかめ、ひいては美術史的解釈や批評をも行おうとする映画が生まれようとしている。つぎに、かつての純粋映画の系統をひく実験的な美術映画がある。最近とくにフィルムをカンヴァスと同じ一つの媒体として直接フィルムに映像を描くマクラレンやレン・ライのような作家が注目されている。もちろん美術映画にはこのほか観光映画の発展したもの、ある作家の制作過程や生活の記録、技法を学ぶための教育映画、古美術などを考証する科学的な映画などいろいろあるが、それらを一括して美術映画と呼んでいるわけである。（一般にアメリカでは art film，英国では film on art，フランスでは film d'art または film sur art と呼ばれている。）ここで注意して置きたいのは、美術映画では音の領域が密接に結びつくことで、ことに実験的な作品や新しい手法の映画では、音楽にも新しい方法がこころみられる。カルダーのモビール映画にはジョン・ケージという若い作曲家の「具体音楽」（ミュージック・コンクレート）に近い音楽が録音されている。また解説も、ピカソの「ゲルニカ」映画のように詩人エリュアールの詩を女優マリア・カザレスが朗誦するといつた例もある。このように美術映画の創造的な面は限りない未来を約束しているのである。

（フィルム・ライブラリー運営委員）

美術映画に見るもの

猪熊弦一郎

戦争中、私はパリにあつて珍らしい映画を見る事が出来た。それはフランスの俳優であり、演出家であるサッシャギトリーが、二十才頃に自費で撮つたという映画である。其中にはドガ、ロダン、モネ、ルノアール等十数人の生前の貴重な動く姿がある。二十数年死蔵されていたこの映画は、戦争勃発と同時に「トレゾール・ド・フランス」（仏蘭西の宝）と言う題名の下に、一般に公開され、私達は毒ガスマスクを肩にかけ、二度程、燈火管制下のパリの劇場に出かけた事がある。現代に動く故人の姿を再び見られ様とは夢にも思つて居なかつた。実にこの映画は世界の宝であり、美術映画の最初のものだと思う。

この映画に刺戟されて出来たに相違ないと思われる美術映画が、終戦後幾多製作されるようになつた。マチス、ロダン、マイヨールをはじめ、多くの美術映画が日本でも公開されたが、マチスの映画はすでに再び作る事が出来ない貴重な記録となつてしまつた。

最近カルダーのものを見せられたが、これは色で撮られているし、カルダーのモビールが実に巧みに駆使され、自然の現象との対比の中に、美しい音楽と共に運ばれて行く特種な近代映画様式を作り出している。私は美術映画として、ドキュマンタルな意味を離れて、立派な独立した映画作品になつていると思う。

日本でも、其後ブリジストン製作の川合玉堂、梅原龍三郎等をはじめ、幾多の美術映画がつくられるようになつたが、ドキュマンとしても立派であり、又映画作品としても素晴らしいものにしてほしいものである。現に一日も早く作らねばならぬ貴重な作家が幾人かある様に思うし、こうした映画は国家の費用をもつてどん〳〵作るべきである。なお出来れば色彩で撮ることを希望する。

良い美術映画を作るには、優れたスタフと完璧の準備が必要であり、それは作家と作品の中から其人をつかみ出し、構築して行く新しい創造精神がなければならない。何れにしろ、将來貴重なドキュマンになるのであるから、作者に重大な責任があるし、仕事としても大いにやりがいがあるものといえよう。（洋画家）

美術映画の展望

「美術映画」ということばは、日本では恐らく戦後になつて使い始められたものでしょう。美術作品や作家に関する映画は、戦前の記録映画・文化映画の中にもありましたが、特に「美術映画」と呼ばれることはありませんでした。ところが第二次大戦中から戦後にかけて、イタリアのルチアノ・エンメルが美術作品を分

析し、再構成して映画的に表現しようと試みはじめ（「キリストの生涯」「地上の楽園」）今までの単なる記録や解説に対して、映画的な表現に重点をおいたものが現われました。この美術映画の新しい傾向は、フランスその他の国に影響を及ぼし、A・ルネー（「ゴッホ」「ゴオギャン」）、R・リュコオ（「ロダン」「ブールデル」）、F・カンポウ（「マチス」）、ロ・デュカ（「税関吏アンリ・ルッソオ」）などの人々を出し、それと同時に文化映画・教育映画の中でも、美術映画の存在がクローズ・アップされてきました。

映画独自の技法――クローズ・アップ、移動撮影、カット・バックなど――による解釈や表現といっても、その方法はさまざまで簡単に説明しつくすことはできませんが、映画的表現が美術作品の本来もっている特質を、拡張し発展する場合もありますし、又逆の場合も見られます。そこにいわば美術映画の可能性と限界があるわけです。

映画的な表現に重点をおく傾向に対して、一方では「美術映画」の目的や範囲を逸脱するものとして、強く排撃する人たちもおり、美術映画の国際会議でもしばしば論争的になったと伝えられています。しかし美術映画が写真や幻灯画ではなく映画である以上、独特の表現をもつことや、肉眼でみる場合とは異なった印象を与えることは当然で、これに対する批難は、映画的な表現についての無理解のためと思われます。又一方では、素材を美術に限定することが、映画にとって一つの制約になる場合も考えられ、美術映画の開拓者たち――ニンメル、カンポウ、リュコオらが四九年頃から劇映画に転向していったのは、美術映画の限界を暗示するものといえましょう。

ところで各国の美術映画界の状勢はどうでしょうか――ユネスコがベルギーの雑誌《造型芸術》の協力の下に出版した「美術映画」に、一九五二年一二月現在の詳細な各国のリストが掲載されていますが、これによりますと日本を除く各国で、実に七二八本もの美術映画が作られていることがわかります。

数の多いものから、主な国々について簡単にふれてみましょう。

アメリカ――一四一本

ニューヨーク近代美術館をはじめ、各美術館、大学などのきもいりのものが多く、原始芸術からコルダー、レジェなど現代まで、取り扱う対象の範囲も非常に広い。技術指導映画が多いこと、色彩の普及度が高いこと（九三本）、全体として紹介・解説の範囲を越えないことなどが特徴です。「コルダーの作品」「モーゼスおばあさん」「グラント・ウッド」「ヴィナスの誕生」などが日本でも公開されていますが、そのほか「アメリカにおけるF・レジェ」「光の映像」「抽象絵画」「近代美術とは」などの作品があります。

イタリア――一二七本

すぐれた古典を数多くもつているこの国で美術映画が盛んなのは当然で、又古い作品を扱ったものが多い。さきに述べました先駆者エンメル以外では、J・バッティの「ボッティチェルリ」（日本公開）、劇のA・ブラッセッティの「サン・アンジェロ寺」「サン・ピエエルの円屋根」、U・バルバロの「カルパッチオ」などが知られています。

フランス――一一一本

日本で外国の美術映画といえば、先ず第一に考えられるものはこの国で、最も多く紹介されています。イタリアに比べて新しい作品を扱ったものが多いのが目立ちます。前述のもののほか、A・ルネーの「ゲルニカ」、J・アウレルの「雅びな宴」（ワット！）、リュコオの「像を刻む人たち」などが新しい傾向の代表作といわれます。そのほか、画家として有名なレジェの「機械の踊り」、デュランの「ブラック」、美術史家R・ユイグの「ルーベンスとその時代」、グレミョンとカストの「人生の魅力」、メルカントン夫人の「一八四八年」、J・ロッドの「マイヨール」など、その作品は全く多彩を極めています。

ドイツ――六七本

いわゆるクルトウル・フイルム（文化映画）の伝統あるこの国には、技術的にガッチリした作品が多い。陶器を劇的に取扱ったカール・ランプの「ブステリ」をはじめ「アルテンベルクのドーム」「S・ロッホナー」「水」などがあります。

ベルギー――三六本

この国に美術映画が盛んなことは案外知られていません。ポール・エセールスの「ルーベンス」「ピカソ訪問」「ルノアールからピカソまで」は第一級の作品で、特に後者は美術史的解釈や批評の上に立つた映画的表現において最も成功したものといえます。彼の協力者ストルクも彼自身「古代ベルギーの瞥見」「パアク島」などを作っています。

そのほか

カナダ（三二本）は、殆んどが国立の映画機関で作られ、シネ・プラスティック派のノーマン・マクラレンの諸作「幻想」「ヘン・ホップ」などが目立ちます。

チエコスロバキヤ（二九本）ではK・プリッカの「バロックのプラーグ」など、**イギリス**（二七本）では、A・ショーの「彫刻の鑑賞」のように解説的なもの、**ソヴエト**（一六本）では、ジエリヤブジスキーの「レーピン画集」が日本で公開されています。北欧は一般に盛んで、**スウエーデン**（一七本）には、K・マルテインの「歴史的宝庫」「騎士の鳥」、ヴィルヘルム皇太子の「ストックホルム宮殿」などがあり、**デンマーク**（二二本）では、劇のカール・ドライエルが「田舎の聖堂」を作っているのに、興味をひかれます。

次に**日本**の美術映画について考えてみましょう。

戦前の文部省映画「法隆寺」「二条城」「室生寺」などは一応除外して、戦後に作られた美術映画は十数本ありますが、その主な製作者は東京国立博物館とブリジストン美術館映画部です。

国立博物館では、「美の殿堂」（一九五〇、理研）をはじめ「上代彫刻」（五一）「桃山美術」（五二）「鎌倉美術」（五三、以上三井芸術プロ）と毎年一本ずつ製作し、記述的な鑑賞指導や解説に重点をおいています。

ブリジストンでは、「川合玉堂」「梅原龍三郎」「高村光太郎」と現代大家の制作活動を記録的に収め、多少解説的な要素も加味しています。最近では「美術家訪問シリーズ」として、一流作家の姿をスナップしたものを作っています。

又製作についていろいろ問題を起しましたが、青年プロダクションの「北斎」は、日本の美術映画を考える場合に忘れることのできない異色ある作品といえましょう。これは北斎の作品を素材にして、映画的に再構成しながら、北斎の生涯と芸術を描いたものです。クローズ・アップ、移動撮影、カット・バックなどの映画的な表現において、又北斎芸術の映画的再現において、現在までは最も成功しております。それは同時に、その後の美術映画にもいろいろ影響を与えているようです。

その他、三井芸術プロの「奈良の大仏」「日本陶磁の美」、TVFテレビ映画の「棟方志功」などがあります。

大勢として、日本の美術映画は、まだ記録的乃至解説・記述的なものが多く、最近に至つて漸く映画的な表現にも関心を示すようになりつつあります。

美術映画については、製作の場合には資金や技術の面で、これを観賞するには輸入の面で、それぞれ非常に困難なのが現状です。むしろ私たちが触れることのできるのは、そのごく一部分といえましょう。

そういう意味で、この「各国美術映画週間」では、許す範囲内で各国の美術映画をとり上げ、比較検討する機会をつくり、愛好者の希望を叶えながら、美術映画の発展に少しでも役立てば幸いです。